

聖書箇所：コリントの信徒への手紙一 3章 10～17節

○当時のコリント教会→人々がそれぞれある宣教者を、本人に認められてもいないのに勝手に担いでグループを作り、争っているという状況

・そもそも宣教者とは何なのかということがよく分かっていないからこそこうした状況が生じたパウロは考えた。そこでパウロは3:5から宣教者論を展開し、「宣教者とは何者でもない。重要なのは神様であり、宣教者とはこの神様に仕え、神様のために力を合わせて働く者なのだ。教会という『神の畑、神の建物』のために働いていく者なのだ」と主張する。そして、コリント教会の人々がそうしたことも弁えず、神様を頭としないでそれぞれ一人の宣教者を担ぎ回って党派争いをしている状況を鋭く批判する。

・その中でも3:6～9では、宣教者論を展開するために農業の譬えが用いられていた。

▶福音は常に成長し続ける生命をその中に秘めた種。

▶その種をパウロが「植え、アポロは水を注いだ。しかし、成長させてくださったのは神」である。

▶教会共同体は神の畑であり、宣教者はこの神様のもとで立場と役割を与えられて働く者なのである。

このようにパウロは福音宣教者の立場と役割を、神様御自身の偉大な御計画と働きの中で正しく位置付けて説明する。「植える者」も「水を注ぐ者」も決して福音宣教の中心的人物ではない。彼らは「成長させてくださる神」の道具に過ぎない。それゆえ、コリント教会の人々は福音宣教者に注意を集中するのではなく、彼らを用い、生き生きと働かれる神様御自身に目を向けて、すべての賛美と感謝を神様に献げるべきだとパウロは主張するのである。

・3:9では、さらに教会共同体が「神の建物」と言われていた。そして3:10から、パウロはさらに建築の譬えによって宣教者の責任について論を展開していく。

【注解】

「わたしは、神からいただいた恵みによって、熟練した建築家のように土台を据えました。

そして、他の人がその上に家を建てています。ただ、おのおの、どのように建てるかに注意すべきです。イエス・キリストという既に据えられている土台を無視して、だれもほかの土台を据えることはできません。」(10～11 節)

- ・パウロは自分は「熟練した建築家のように土台を据え」と言う。それは教会という「神の建物」の土台に他ならない。

※それは建築物としての教会堂の土台という意味ではもちろんない。パウロが教会を「神の建物」と呼ぶ時、そこで考えられていたのは信仰者の群れ、共同体であるコリントの教会のことに他ならない。その土台を自分は据えたのだとパウロは言っているのである。それはつまり、イエス・キリストによる神様の救いの恵みにあずかり、神の民として生きる者の群れが真に神の民として歩むための土台がパウロによって据えられたということに他ならない。

- ・このように言うとパウロがまるで宣教者としての自分の役割を誇っているかのように感じられるかもしれないが、もちろんそれは誤解である。パウロが教会の土台を据えたその働きはただ「神からいただいた恵みによって」為されたのであり、パウロはそのことをしっかりと理解していた。
- ・パウロは決して自分の知恵や才覚で教会共同体の土台をこしらえたわけではない。彼が据えた土台は、人間が考えたり作り出したりしたものでは決してない。11 節に「イエス・キリストという既に据えられている土台」とあるが、パウロが教会の土台として据えたのは、イエス・キリストに他ならない。パウロがそれを据えたというのは、十字架と復活を中心としたイエス・キリストの福音を宣べ伝えたということである。
- ・それは「神からいただいた恵みによって」為された働きであり、神様が主体となり、パウロを用いて為された伝道の働きであった。
- ・パウロ→もともとはイエス・キリストを信じる信仰に敵対し、教会を迫害していた人

そのパウロに、復活の主イエス・キリストが出会い、彼を捕え、キリストを宣べ伝える使徒としてお立てになった。彼はこのキリストとの出会いによって人生を 180 度変えられて、今、伝道者として生きている。それは全て、彼に与えられた神の恵みによることだった。彼は、自分に出会って下さった主イエス・キリストをそのままに、何もつけ加えず、何も取り除かずに宣べ伝えることによって、熟練した建築家のように教会という共同体の土台を据えることができたのである。

- ・その土台の上に他の宣教者が「家を建てている」とパウロは言う。アポロもその一人に他ならない。農業の譬えではパウロは「植え、アポロは水を注いだ」と、それぞれの宣教者としてのその役割を語っていたが、ここでも同じようなことが言われている。パウロがイエス・キリストという土台を据え、その土台に他の宣教者は信仰という家を建てていく。これが宣教者の責任である。

- ・「ただ、おのおの、どのように建てるかに注意すべきです」とパウロは警告を与える。なぜならば、当時のコリントの教会には、「イエス・キリストという既に据えられている土台を無視して、ほかの土台を据え」、そこに信仰という家を建てていくような誤った宣教者がいたからである。

- ・パウロの論敵たち

→パウロが宣べ伝えたイエス・キリストとは違うイエス・キリストを宣べ伝えていた。十字架拔きのキリストを語り、自らの知恵、知識を誇りにして自分は完全に救いに到達した人間だとうぬぼれていた。そして周りを見下し、裁き、他の人も自分のこの知恵、知識で救われなさいと唆していた。

→自分のエゴを土台に教会を建てようとしていた。

- ・宣教者はそんなことで教会を建てていくことはできないとパウロは警告する。

○「この土台の上に、だれかが金、銀、宝石、木、草、わらで家を建てる場合、おのおのの仕事は明るみに出されます。かの日にそれは明らかにされるのです。なぜなら、かの

日が火と共に現れ、その火はおのおのの仕事がどんなものであるかを吟味するからです。」(12～13節)

- ・さらにパウロの建築の譬えは続く。どのような素材を用いて家を建てるかという問題を問題にするのである。

- ・「この土台の上に、だれかが金、銀、宝石、木、草、わらで家を建てる場合」

→十字架につけられたキリストという正しい土台の上に教会という共同体を建て上げていくとしても、何によって建てるかでその姿は変わって来る。私たちが、自分の人生を、また教会を建て上げていく時に、何によって、何を素材として建てるかが問われている。ここには六つの素材が並べられているが、前半の三つ(「金、銀、宝石」)と後半の三つ(「木、草、わら」)に区別されていると言える。

- ・「かの日」、すなわち神様がこの世のすべての者をお審きになる終わりの日に、おのおのが建てた建物が火(神様による審きの火)によって吟味される。そして、それが残るものか、燃え尽きてしまうものか、どちらであるかが明らかになると言う。

- ・神様の裁きによって、宣教者が建てる建物は「残る」もの(金、銀、宝石で建てられたもの)と「燃え尽きてしまう」もの(木、草、わらによって建てられたもの)とに分けられる。つまり、神様の審きに耐えられるものと、そうでないものがあるのである。そのことは、何を素材として建てるかによって決まってくるとパウロは言う。

- ・問題は『「残る」素材って何?』『燃え尽きてしまう』素材って何?』ということ

これに関して、横浜指路教会の藤掛順一先生が以下のように語っている。

「私たちは、教会を、また自分の人生の家を建てていくに際して、神様の審きに耐えられるような素材を捜し出し、吟味しなければなりません。人間の目から見て、これは立派だ、すばらしいと思われ、評価される人生が、神様の審きに耐えられるとは限りません。いわゆる、功成り名遂げた人生が、神様の目に値高いわけではないのです。むしろ社会のかたすみで貧しく目立たない人生を送った人が、しかし主を信じ、み言葉によって導かれ支えられて生きた、その人生の方が、神様の審きにおいて残るもの

となるのです。教会を建て上げていく上でも、お金持ちが沢山献金をしたり、優れた能力を持った人がすばらしい働きをすることは、教会の目に見える部分を立派にするかもしれませんが、神様の目から見て、本当に教会を建て上げていく素材は、病気や老いで寝たきりの人が、日々教会のことを覚えて人知れず祈るとりなしの祈りだったりするのです。私たちは、自分の人生を、そして教会を建て上げていくことにおいて、何を用いて建てるかをよく吟味したいと思います。そこにおいて、人間の感覚や常識に捕われるのではなく、終わりの日の神様の吟味に本当に耐える素材を見出していきたいのです。そういう素材を見分けるためのこつは、神様が既に据えて下さったあの土台、十字架につけられた主イエス・キリストという土台と、その素材がしっかりかみ合うかどうか、です。土台とその上に建てられていく建物とがしっかりかみ合い、マッチしていることが大切です。十字架につけられたキリスト、つまり神様がその独り子を与えて下さるほどに私たちを愛して下さった、その自己犠牲の愛という土台としっかりかみ合い、結び合う素材によって、自分の人生を、また教会を建て上げていきたいのです。」

○「だれかがその土台の上に建てた仕事が残れば、その人は報いを受けますが、燃え尽きてしまえば、損害を受けます。ただ、その人は、火の中をくぐり抜けて来た者のように、救われます。」(14～15 節)

- ・ 宣教者の建てる建物(教会)が終わりの日の審きにおいて残れば、「その人は報いを受け」る＝神様が私たちの働きを喜び、豊かに報いて下さる。しかし、それが燃え尽きてしまえば、損害を受ける＝宣教者はショックを受ける。けれどもその人自身は、「火の中をくぐり抜けて来た者のように、救われ」とパウロは言う。それはつまり、宣教者が宣教をしたその結果で私たちが救われるか否かが決まるのではないということである。パウロにとって、救いはすべてイエス・キリストの十字架の贖いにかかっている。イエス・キリストの贖いのゆえに、宣教者が終末の裁きにも残るような仕方で教会を建て上げよ

うがそれに失敗しようが、そんなことに関係なく神様はその人を救ってくださるのである。

- ・これは私たちにとっては慰めの言葉。私たちもまた一人ひとり宣教者であり、イエス・キリストという土台の上に教会、また自分の人生という建物を建てていく存在であるが、私たちが本当に終わりの日の審きにおいて残る家を建てていくことができるかと言え、私たちは本当に欠けが多く、間違えてばかりでおぼつかないところがあることを認めない。しかし私たちが建てる人生の建物が、また教会が、どんなに欠けの多い、問題に満ちた、燃え尽きるしかないものであっても、十字架につけられたキリストという土台の上に建てられている限り、主の救いは揺るがないのである。

○「あなたがたは、自分が神の神殿であり、神の霊が自分たちの内に住んでいることを知らないのですか。神の神殿を壊す者がいれば、神はその人を滅ぼされるでしょう。神の神殿は聖なるものだからです。あなたがたはその神殿なのです。」(16～17節)

- ・パウロは教会員一人ひとりの内に「神の霊」が住んでいて、それゆえに教会員一人ひとり、そして教会員一人ひとりから成る教会そのものが「神の神殿」であると語る。そして自分が据えたイエス・キリストという土台を無視して、人間が神様に代わって教会内に支配を振るい、その「神の神殿を壊す者」の裁きを語る。
- ・注解書によれば、それはイエス・キリストの十字架の贖いの救いを否定することになるからとのことである。

○今回の聖書箇所から思うこと

- ・宣教者の責任について考えさせられる箇所だった。
- ・しかし、イエス・キリストの贖いのゆえに、宣教者が終末の裁きにも残るような仕方で教会を建て上げることができようがそれに失敗しようが、そんなことに関係なく神様はその人を救ってくださるとパウロは主張した。それは大きな慰めだと感じたが、しかし

16～17 節の箇所は注解書には、パウロが据えたイエス・キリストという土台を無視し、自らのエゴの上に教会を建てようとして教会を破壊しようとする者の裁きをパウロが語ったと書かれている。それを読んで、イエス・キリストの救いの範囲について考えさせられた。

- ・私はコリント教会に仲たがいをもたらしめている人を警告するくらいの意味でパウロは 16～17 節で裁きを語っているのだと解釈して、結局のところそういう人をもイエス・キリストは救い給うと信じているのだが、注解書の言うようにイエス・キリストの十字架を否む者は滅ぼされてしまうのか。パウロはどのように考えていたのか。そのあたりの皆さんの考えをお聞きしたい。